

〔課題演習報告〕

たくましく生きる力を育てる中学校キャリア教育の充実に関する研究 －「キャリア形成」を意識した学級活動(3)を通して－

森 沙 織
Saori MORI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース
糸島市立二丈中学校

(2018年1月5日受理)

学習指導要領の改訂に伴い、小、中、高等学校の特別活動には、学級活動の内容の(3)に「一人一人のキャリア形成と自己実現」が位置づけられた。これまで、中学校では職場体験学習がキャリア教育の中核的活動として実施されてきたが、体験が体験で終わり、キャリア教育の目標を達成するまでに至らなかった。そこで、新学習指導要領においてキャリア教育の中核を担う特別活動における学級活動(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」の授業モデルを開発し、生徒のキャリアレジリエンスの育成に対する学級活動の影響を分析した。研究Ⅰでは、在籍校における生徒のキャリアレジリエンスに関する実態調査と教師のキャリア教育に対する意識調査を行い、学級活動(3)の指導の充実に生かしていくこととした。研究Ⅱ・Ⅲでは、4段階の思考過程を位置づけた学習過程と2段階の振り返り活動を実施し、生徒のキャリアレジリエンスに変化が見られるかを検証した。その結果、第2学年において、キャリアレジリエンス能力の将来設計能力について有意差が見られた。また、生徒自身が意思決定した取組を振り返る中で達成感や次の課題へとつながる記述をしていたことから、自己理解を深めることにもつながったと推察される。

キーワード：キャリア教育、学級活動(3)授業モデル、キャリアレジリエンス

1 問題と目的

(1) 在籍校の課題

本校は「現代社会の要請に応える学校」として「変革する社会に適応し、たくましく生き抜く力を身につけた生徒を育成する」ことを学校経営の基盤に、本年度の教育目標「地域を愛し、豊かな心を持つ、自ら考え、学び、行動できる、たくましい生徒の育成」が掲げられている。そこで「地域を愛し、地域に学ぶ」新たなカリキュラムの創造として、地域学習を主体とした「総合的な学習の時間」の見直しや新学習指導要領移行に向けた授業改善等に取り組んでいる途上である。キャリア教育においては、職場体験学習をはじめ様々な体験活動を実施しているが、イベント化や形骸化を懸念する声も聞かれる。

(2) 現代社会の要請

キャリア教育

キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的

自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている(中央教育審議会, 2011)。つまり、子どもたち自身が将来、自分の人生を切り開いていくために必要な力を学校教育の中で身につけさせ、社会へと送り出すことが求められている。しかし、キャリア教育が提唱されて以後、キャリア教育は職場体験活動をすれば十分であるという誤解が生じ、キャリア教育が求める4つの「基礎的・汎用的能力」を育てるという本質が見えにくくなった。その誤解を解消することがキャリア教育を推進する上での課題のひとつになっている(藤田, 2014)。

これからのキャリア教育は、単に職場体験活動の実施や中学校卒業後の出口指導のような高校進学に向けての進路指導を中心とすることから抜け出さなければならない。キャリア教育は、未来を支える子どもたちの進学・就職後の「社会的・職

業的自立や、生涯にわたるキャリア形成を支援する」ための役割を担う教育として、学校全体で取り組みの改善を図る必要がある。さらに、情報技術革新に起因する社会の急速な変化にも、恐れず対応していく力と態度を育成していかなければならないことを教師自身が再認識しなければならないと考える。

新学習指導要領の中の特別活動

文部科学省(2017)は、特別活動が「学校教育全体で行うキャリア教育の中核を担う」ことを新学習指導要領の総則に示した。さらに小・中・高等学校の特別活動には、学級活動の内容(3)に「一人一人のキャリア形成と自己実現」が位置づけられた。これは、キャリア教育が「子どもの自分づくり、人生づくりのサポート」であり(諸富, 2007)、一人一人の子ども自身が自分の人生をどのように歩んでいくのか、どんな自分をつくっていくのかを考えていくための支援を、特別活動を中心に行っていくことが求められているからだと考える。

今後は学級活動(3)の内容をどのような授業で実施するかという課題とともに「キャリア・カウンセリング」のような個別の進路相談や子供が学びの過程を記述し振り返ることができる「キャリア・パスポート」の作成(文部科学省, 2017)など各学年の発達段階に応じた個別の支援をどのように実現させるかについて明らかにすることが求められる。

キャリアレジリエンス

坂柳(2015)は、キャリア教育における「生き抜く力」を「変化する社会のなかで、困難な状況にあっても、それを乗り越えて、自分なりのキャリアを創造していく力」と暫定的に定義し、キャリアレジリエンスの用語を互換的に用いた。キャリア教育において子どもたちの「生き抜く力」、つまり「キャリアレジリエンス」を育むためには、基礎的・汎用的能力(能力的側面)だけでなく「生き抜く態度(態度的側面)」の育成も併せて行うことが必要だと述べている。まだ暫定的な定義ではあるが、キャリアレジリエンスはキャリア教育が育成すべき能力的側面と態度的側面を合わせ持った指標を目指している。これらは、子どもたちにキャリア教育を通して身につけさせたい資質・能力であることから、キャリア教育を推進する上で子どもたちの変容を見出す指標となると考える。

先行研究によると、中学校における職業観の形成を学級活動で行うように学習指導要領に示されながらも、実際には学級活動の運用が軽視される傾向にあり、中学校における職業観形成の中心的

な場である学級活動の授業のあり方とその指導効果を検討する必要を訴えている。また「中学校段階という進路探索期の進路学習として、どのような教材を提示し、どう展開していくのか、その学級活動の授業モデルの開発が必要である」とも述べている(八並・後藤, 1997)。

以上のことから本研究の目的は、中学校学習指導要領第5章特別活動(平成29年3月告示: 文部科学省)に示された学級活動(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」の授業モデルを開発し、生徒のキャリアレジリエンスの育成に対する学級活動の影響を分析しようとするものである。ここでいう授業モデルとは、生徒の4つの段階の思考過程「課題をつかむ(つかむ)」「原因を追究する(さぐる)」「解決方法を考える(見つける)」「個人目標を意思決定する(決める)」を位置づけた学習過程で題材を展開し、2段階の振り返りを活動中に設定することである。この4段階の学習過程は自己指導能力を育てる授業展開として小学校の学級活動において提案されたが(国立教育政策研究所, 2015)、中学校でこの4段階の思考過程を取り入れた授業実践は多く報告されていない。

そこで研究Ⅰでは、教師のキャリア教育に対する意識調査を行い、本校のキャリア教育における課題を明らかにするとともに、キャリアレジリエンス尺度を用いて生徒の実態調査を行い、生徒のニーズを明らかにした。研究Ⅱでは、中学1年生における学級活動(3)の中で、自分で意思決定を行い、意思決定を行ったことを実施していく4段階の思考過程を位置づけた学習過程を通して、キャリアレジリエンスを態度的側面、能力的側面から高めることができるかどうかを検証した。研究Ⅲでは、研究Ⅱの課題を元に題材や教材を見直し、キャリアパスポートの活用方法について検討した。

本研究を通して開発された学級活動(3)の授業モデルが、キャリア教育の充実に向けた授業づくりの提案となることを試みる。

2 研究Ⅰ：実態調査

(1) 目的

在籍校における生徒のキャリアレジリエンスに関する実態調査と教師のキャリア教育に対する意識調査を行い、今後の学級活動(3)の指導の充実に調査結果を生かしていくことを目的とする。

(2) 方法

①調査実施日

平成X年10月27日(生徒)

平成X年12月16日(教師)

表1 キャリアレジリエンス態度尺度 (CR-AS)

自己肯定	自己のよさを理解し、肯定的に認める。
援助関係	コミュニケーションを図り、援助的な人間関係を構築する。
楽観思考	何事にもポジティブに考え、前に踏み出そうとする。
将来展望	将来に夢や希望を持っている。

表2 キャリアレジリエンス能力尺度 (CR-CS)

自己発揮能力	自己を理解し、自己発揮ができる。
人間関係能力	コミュニケーションを図り、豊かな人間関係が構築できる。
問題対応能力	問題を見ついたり、解決方法などを考えたりすることができる。
将来設計能力	将来に向けて、夢や目標を描くことができる。

②調査対象

福岡県内の公立中学校 1 校 第 1 学年 57 名
教師 15 名

③調査方法

生徒の実態調査には、キャリアレジリエンス尺度を用いた。この尺度は「生き抜く態度（態度的側面）」4 領域(表 1)と「基礎的・汎用的能力（能力的側面）」4 領域(表 2)の両方を測定することができる。キャリアレジリエンス能力尺度(CR-CS)に示される 4 つの下位尺度(表 2)はそれぞれ、自己発揮能力＝自己理解・自己管理能力、人間関係能力＝人間関係・社会形成能力、問題対応能力＝課題対応能力、将来設計能力＝キャリアプランニング能力というように基礎的・汎用的能力に対応している。なお、質問紙による 5 段階(5～1 点)で評定し、各領域の得点範囲分布は 4～20 点、中間点は 12 点である。この得点が高いほど、当該領域の態度・能力が高いことを示す。

教師の意識調査には、報告者が作成した質問紙による「キャリア教育に対する意識調査アンケート」について自由記述形式で調査を行った。調査項目は、「学校で行われている教育活動のうち、キャリア教育だと思うもの」、「キャリア教育の必要性について」、「キャリア教育の視点を意識した教科の授業づくり」、「キャリア教育について思うこと」の 4 つである。

(3) 結果と考察

①生徒の実態調査から

表 3, 4 は CR-AS と CR-CS のそれぞれの下位尺度における平均得点である。②「援助関係」が最も高い数値を示した。友人や家族、教師を含めて、困ったときに頼りになる人物や自分の気持ちを素直に話せる人物の存在が身近にあることを示してい

表3 CR-AS の結果

CR-AS の下位尺度	平均得点
①自己肯定	14.3
②援助関係	17.6
③楽観思考	14.7
④将来展望	15.0

表4 CR-CS の結果

CR-CS の下位尺度	平均得点
⑤自己発揮能力	14.8
⑥人間関係能力	16.2
⑦問題対応能力	13.8
⑧将来設計能力	15.0

る。①「自己肯定」においては 4 つの態度領域のうち、最も低い数値となった。これは自分の良さを実感し必要とされている、あるいは自分に自信が持てるなど自己の良さを理解したり、他者から認められたりする機会が少ないことが推測される。④「将来展望」は比較的高い数値を示しており、将来への期待や夢を描いている生徒は多いと考える。⑦「問題対応能力」は CR-AS, CR-CS の結果の中で一番低い数値を示した。これは、目の前で起こった問題にどう向き合い、どう対処するかを考えることができると感じている生徒が少ないと考える。

質問項目別に見ると、⑤「自己発揮能力」では「私は、自分のことがわかり自分らしさを発揮できる」という質問項目が最も低い数値を示していた。⑥「人間関係能力」では「相手のことを考えた行動や他者と協力しながら活動する」項目が低く、コミュニケーションをベースにした能力に自信のない生徒がいることがわかった。

この結果から、総合的な学習の時間をはじめ、学校の教育課程全体で行われる様々な活動が断片的に独立した状態で行われ、子供が自分の特性や考え方などを客観的に捉える場面や自分で意思決定したことを実行し、振り返り、再度挑戦するというような自分自身の生活に落としとして考える場面が不足しているのではないかと推測される。

例えば、キャリア教育の一環として行われてきた職場体験活動等の学習が、職業を体験するにとどまり、肯定的な自己理解を図る学習が意図的に計画されていないことなどが考えられる。

以上のことから、本校では生徒一人一人の自己肯定感を育てるというところに課題があることが見えてくる。

②教師の意識調査から

有効回答数は 9 名であった。講師経験も含めた

表 5 教師がキャリア教育と思う教育活動

総合的な学習の時間に関する活動		計 15 名
内 容	職場体験学習	9
	高校一日体験学習	3
	立志式の取組	3
進路指導		計 4 名
道徳教育		計 3 名
特別活動に関する活動		計 2 名
内 容	体育祭・文化祭等の学校行事	1
	薬物乱用防止教育等	1

経験年数別に見ると 1～5 年 1 名、11 年以上 2 名、20 年以上 6 名である。

結果、キャリア教育は職場体験学習と捉えている教師がほとんどであることがわかった(表 4)。「キャリア教育の必要性」では、すべての教師が「必要」と回答し、教育活動におけるキャリア教育の位置づけは教師意識の中で高い。しかしキャリア教育の進め方やキャリア教育と他教科との関連性、生徒の基礎的・汎用的能力の育成につながる具体的な授業づくりには課題がある。

教師の意識調査から、キャリア教育の必要性や教科指導の中でキャリア教育の視点を意識した授業づくりを行おうとする姿勢は見られるが、教科間の関連づけや学びの連続性に課題を感じる教師の姿がある。その結果、知識重視の指導に偏ったり、体験的な学習に終始したり、子どもの自己理解につなげた指導となっていない可能性がある。その結果、生徒が問題を自分で見つけたり、その解決方法を自分で考えたりする力に課題があると推測できる。

生徒自身が直面する自分の課題に気づき、その解決に向けて、自己の能力を発揮できるようにするためには、これまでの授業をキャリア教育の視点から改善することが求められていると考える。

3 研究Ⅱ：授業実践 1

(1) 目的

学級活動(3)において、4 段階の思考過程を学習過程に位置づけ、生徒のキャリアレジリエンスに変化が見られるかを検証することを目的とする。

(2) 方法

①期間

平成 X 年 11 月～12 月

②対象

福岡県内の公立中学校 1 校 第 1 学年 57 名

③測定内容

・キャリアレジリエンス尺度(坂柳, 2016)

表 6 授業実践計画

教育課程	実施内容	★…本時
学活(3)	なぜ私たちは学ぶのだろう	
学活(3)	学習の達人になろう	
学活(3)	★自分に合った学習方法を見つけよう	
取組：テスト勉強期間中に実践する		
学活(3)	学習の振り返り	
総合	自分の夢や希望について考えよう	
学活(3)	職業について考えよう	
総合	職業調べ	



図 1 将来の生き方に関する課題を意思決定する授業モデル

・生徒の取組状況の変化

④手続き

学級活動(3)の題材「自分に合った学習方法を見つけよう」において、生徒が自分の学習に関する課題を認識し、その解決に向けてどんな方法で克服すればいいのか図 1 の学習過程の中で意思決定し、自己目標の実践に取り組んだ。取組の中間と最後の 2 段階に振り返りを設定し、取組内容の見直しを行った。取組がうまくいっていない生徒には、中間の振り返り時に教師からのアドバイスをを行った。授業の実践計画は関連する総合的な学習の時間の内容と合わせて表 6 に示した。

⑤本時の内容

内 容：学級活動(3)-内容ア

「社会生活、職業生活との接続を踏まえた主体的な学習態度の形成」

題材名：「自分に合った学習方法を見つけよう」

ねらい：級友と学習に関する課題を共有し、様々な学習方法の交流を通して、自分の学習の仕方を振り返り、自分に合った学習方法を選択・意思決定し、実施することができる。

(3) 結果と考察

CR-AS 及び CR-CS について、得点をもとに各 4 領域の平均得点と標準偏差を算出し、実践の事前と事後の変化について t 検定を実施した。結果は、すべての領域において有意な変化は認められな

った。しかし、家庭での取り組み状況について、1つ以上意思決定した勉強方法を実施率で表し、中間振り返りの時の実施率と最後の振り返りの実施率を比較した。結果は、中間の振り返り時は約60%だったが最後の振り返り時の実施率は約90%となった。これは振り返りを2段階設定し、自分の現状を自分で見直したり、教師からの助言があったりしたことで、決めた勉強方法をやってみようという意識が強化され、生徒の行動変容につながったことが考えられる。また中間振り返りの際に、自分で決めた勉強方法が合わなかったために変更した生徒が数名いた。これは自分の特性を理解し、自分にあった勉強方法に変更するという自己理解と課題対応能力が働いたと考えられる。

このように自分の課題に気づき、自分で目標を設定し解決に向けた方法を話し合い、意思決定する体験を継続して実践することが自己理解や問題対応能力を育む授業づくりに繋がると考える。一方で、意思決定が苦手な生徒や決めたことを実施することに課題を抱える生徒もあり、授業だけでは肯定的な自己理解や課題に対応する力を身につけることが困難な生徒も存在する。このような生徒には、教師の言葉かけやさらに細やかな支援が必要である。そのために、個に応じたキャリア支援を継続して行うキャリア・カウンセリングの充実や生徒個人が自身を振り返る手立てとしてのキャリアパスポートの作成などを検討する必要があると考える。また、学級活動(3)の内容イ「社会参画意識の醸成や勤労観・職業観の形成」、ウ「主体的な進路の選択と将来設計」に関する教材の開発についても検討しなければならない。

4 研究Ⅲ：授業実践2

(1) 目的

4段階の思考過程を位置づけた学習過程による学級活動(3)の授業実践と2段階の振り返りを位置づけた事後の活動を全学年で実施し、生徒のキャリアレジリエンスを高めることを目指す。また、授業と関連させたキャリア・パスポートの活用方法についても検討する。

キャリア・パスポート

生徒のキャリア形成を促す手立てとして生徒が自分のこれまでの歩みを振り返り、これからの生き方について考える記録ノートである。これは、いわゆるポートフォリオ的な教材で、中学校学習指導要領解説特別活動編(平成29年7月)には、このような教材を活用した活動の意義について次の3つを挙げている。1つ目「中学校の教育活動全体

で行うキャリア教育の要としての特別活動の意義が明確になること」、2つ目「小学校から中学校、高等学校へと系統的なキャリア教育を進めることに資するということ」、3つ目「生徒にとっては自己理解を深めるためのものとなり、教師にとっては生徒理解を深めるためのものとなること」である。鈴木(2003)は、ポートフォリオを「自分のこれまでの歴史を未来に活かす意図で一元化したもの」としている。自分のプラスを見出し、自分の個性や得意を発見し、進路や職業の選択にも役立つとしている。これらを踏まえ、生徒自身が自分のしてきたことや考えたことを見つめ直す手立てとなるよう活用方法について試案する。

(2) 方法

① 期間

平成X年+1年6月～12月

② 対象

福岡県内の公立中学校1校 第1学年 60名
第2学年 57名

③ 測定内容

- ・キャリアレジリエンス尺度(坂柳, 2016)
- ・取組状況と生徒の感想(自由記述)

④ 手続き

第2学年では、総合的な学習の時間の「高校調べ」に関連させた題材として、6月に「高校に進学する理由」を実施し、自分にとっての「学習の意義」を見つけさせ、日常の学習態度を見直すための意思決定を行った。

第1学年では、11月に題材名「自分PR」、12月に題材名「なりたい自分に少し近づくためのプランづくり」を実施し、中学1年生のキャリア発達の課題でもある自分の良さや個性を知る自己理解や将来への憧れ抱くこと(文部科学省, 2011)を中心とした学習内容とした。ここでは紙面の都合上、第1学年の授業の実際を中心に述べる。授業の実践計画は関連する総合的な学習の時間の内容と合わせて表7に示した。

表7 授業実践計画

教育課程	実施内容
(a)学活(3)	自分PRを作ろう
(b)学活(3)	『なりたい自分』に少し近づくためのプランを考えよう
取組：プランを2週間実践する	
総合	糸島を支える人
総合	仕事について考える
総合	職業ガイドブックを作成する

⑤授業実践(a)(b)学活(3)(表7)の内容

内 容：(a)学級活動(3)-内容ウ

「主体的な進路の選択と将来設計」

題材名：「自分PRを作ろう」

ねらい：自分PRを作成することを通して、自分の良さや興味・関心を知り、なりたい自己像を言葉で表すことができる。

授業者：報告者

図1の学習過程に沿って授業を実施した。まず「つかむ」段階で、自分を知る方法について考えさせた。「さぐる」段階では、個人で自分PRを作成させた。留意点として、自分の良いところ、関心や興味があるところなど自分のプラスとなるところだけを書くように指示した。「見つける」段階では、友だちから自分の良いところを付箋に書いてもらい、自分PRに付け加えさせた。「決める」段階では、自分PRを見ながら自分の興味・関心や得意なこと、良いところなどをもとに将来のなりたい自分や生き方について考えさせ、「将来、私はこんな自分になりたい」という自分の将来像について意志決定を行わせた(図2)。

内 容：(b)学級活動(3)-内容イ

「社会参画意識の醸成や勤労観・職業観の形成」

題材名：『なりたい自分』に少し近づくためのプランを考えよう」

ねらい：「自分PR」で意志決定した『なりたい自分』に近づくためのプランを作成し実行することを通して、日常の生活や自己の在り方を自分で改善しようとすることができる。

授業者：報告者

「つかむ」段階では、(a)学級活動(3)で作成した自分PRを活用し「なりたい自分」を想起させながら、「今の自分でなりたい自分に近づくか」と問題提起し、答えと理由を合わせて考えさせた。「なりたい自分」に近づくためには乗り越えなければならない壁(困難)があり、それは人に寄って大きさ、数、種類等が違い、解決方法も人によって異なることを説明した。「さぐる」段階では、「なりたい自分」に近づくには何が必要かを個人で考えさせ、4人グループでの交流を行った。「見つける」段階では、解決策についてグループで話し合わせた。「決める」段階では、「なりたい自分にちょっと近づくためのプラン」を意思決定し、プラン達成の評価基準を個人で作成した後、2週間の取組を実施した。評価は◎、○、△の3段階でチェックするようにした。

帰りの会にプランの振り返りタイムを設定し、

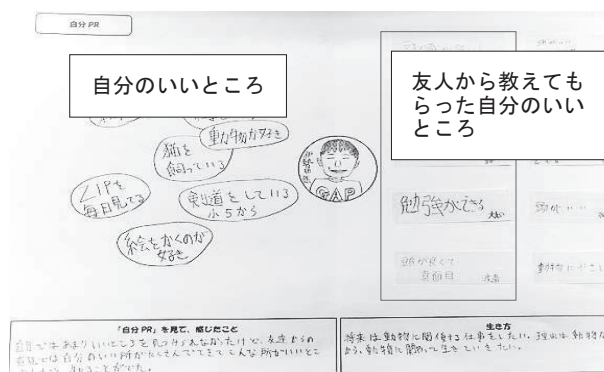


図2 自分PR ワークシート(キャリア・パスポート)

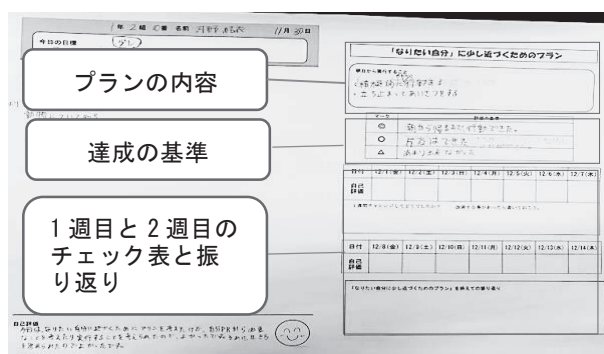


図3 『なりたい自分』に少し近づくためのプラン」ワークシート(キャリア・パスポート)

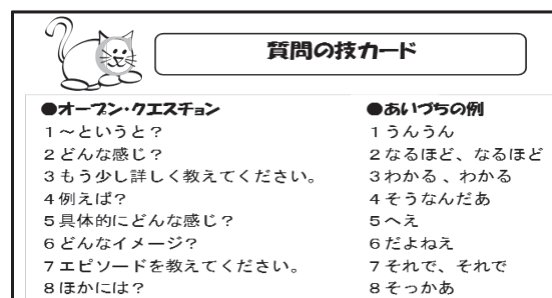


図4 質問の技カード

自分で決めた評価基準をもとに、クラス代表委員の呼びかけで振り返りを行ってもらった。1週間終わった時点で中間の振り返りとプランの見直し(帰りの会で10分間)を行わせた。最終日には、2週間の取組全体の振り返りを表7の総合的な学習の時間の内容と併せて実施した。

⑥ワークシートの作成

キャリア・パスポートの記入が授業の目的とならないように、①②の授業で使用するワークシートをキャリア・パスポートとして保存する。ワークシートの内容については図2、3に示した。

⑦キャリア教育通信の発行

生徒や学級担任の『なりたい自分』に少し近づくためのプラン」の取組に対する意識を持続させたり、家庭での会話の中で将来について話すきっかけとなったりすることを目指し、授業の様子を

キャリア教育通信として保護者向けに発行した。通信で学級活動での話し合いの様子やプランの内容、プラン実施後の振り返りなどを紹介した。

⑧質問の技カードの作成

話し合いの技術を高め『『なりたい自分』に近づくためのプラン』を具体的にするために、ホワイトボード・ミーティング®質問の技カード(ちょんせいこ, 2016)を参考に質問の技カードを作成した(図4)。進行役, 発言者, 聞き手の役割分担を行い, 発言者以外は質問の技カードの内容のみを使って話し合いを行うこととした。

(3) 結果と考察

①キャリアレジリエンス尺度(CR-AS, CR-CS)

CR-AS(キャリアレジリエンス態度), CR-CS(キャリアレジリエンス能力)について, 得点をもとに各4領域の平均得点と標準偏差を算出し, 6月と12月の変化についてt検定で検証した。なお, 欠損値がある生徒のデータは分析対象から除外した。その結果, 第1学年においては各4領域について6月と12月の間で変化は見られなかった。しかし, 自己肯定(6月)の標準偏差を用い, 平均値から上下1/2SDを基準とし, 低群・中群・高群の3つに分け, 自己肯定の項目1「自分には良いところがある。」について6月と12月の得点の平均について比較したところ, 低群・中群に上昇の変化が見られた(表8)。6月から12月の間には夏休みや初めての合唱コンクールの取組があり, 学級活動(3)の授業の効果とは一概に言えないが, 自己肯定が低い生徒にとって自分PRの作成や『『なりたい自分』に近づくためのプラン』の取組は自分のよさに気づくきっかけとなったと考えられる。

第2学年においては, CR-CSの将来設計能力について有意差が見られた(表9)。これは, 高校調べや学級活動(3)での高校進学に向けた自己の生活改善の取組, 職場体験活動に向けた事前学習にお

表8 自己肯定(項目1)の平均の変化(中1)

項目1	6月	12月	人数
自分には	2.44	3.00 ↑	低群 16
良いところ	3.47	3.76 ↑	中群 24
がある	4.58	4.42 ↓	高群 17

表9 CR-CSの各因子の平均値とSD及びt検定結果(中2)

N=59	6月	12月	t値(df=58)
自己発揮能力	14.98(2.38)	15.07(2.91)	0.31
人間関係形成能力	16.54(2.65)	16.34(2.80)	0.65
問題対応能力	14.12(2.98)	13.92(3.37)	0.57
将来設計能力	14.05(2.77)	14.92(3.92)	2.09*

*p<.05**p<.01

いて職業適性検査を実施し, 自分に合った職業を知る活動, 地域で働く人々との交流など将来の生き方や進路選択に向けた活動が計画的に実施されたことにより, 自分の将来について見つめる機会が増えたためではないかと考える。

②『『なりたい自分』に近づくためのプラン』のプランの中間振り返りと最後の振り返り

プランの内容を5つの項目に分類し, 図5に示した。「周りをよく見て積極的に思いやりのある行動をする」や「アドバイスをされたら素直に受け入れて直す」等, 自分の行動や内面について改善したいと思っている生徒が38%を占めた。これは他者との関係の中で自分がどのような関わり方をすればよいのか, 人間関係能力を伸ばそうとする意思が働いたからではないかと考える。

中間の振り返りでプランの変更を行った生徒は14人(全体の23.7%)で, 理由は「内容が実施しにくかったため」や「1週目で達成できたのでさらに目標を高くしたいため」などであった。

表10は生徒の取組終了後の振り返りである。最後の振り返りでは, 1週目よりも2週目に意識してプランに取り組む生徒が多数見られた。また, 「これからも続けたい」とプランの継続を示している生徒が多く(表10㉔), 自分の成長や達成感を感じることができたのではないかと推察する。また, 友だちの良さに気づいたり(表10㉕), 学習の成果を感じたり(表10㉖), 前向きな考えを書いたり(表10㉗)振り返りを通して, 様々な自己の気づきをしている姿が見られた。

③キャリア・カウンセリング

立てたプランのゴールが高く, 2週間ほとんどプランを達成することができなかった生徒がいた。振り返り時に個別に直接アドバイスし, どうしたらよかったか改善策を立てさせた。さらにワークシートへの肯定的なコメントで対応した。達成で

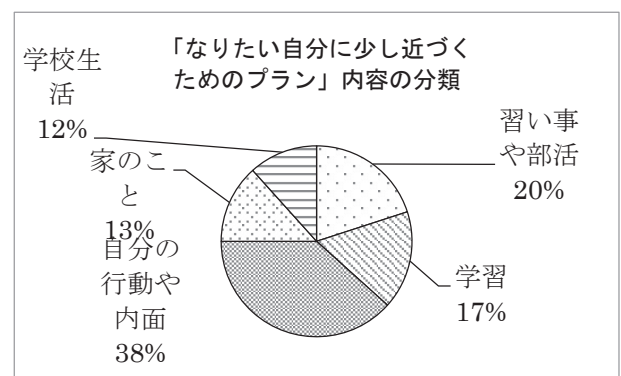


図5 生徒が意思決定したプランの内容分類

表 10 取組終了後の生徒の振り返り記述

○「言う前に、行動する前に、考えて相手の意見や考えを大切に する」と言うことを意識して、この2週間取り組んできたけど、 前より話しかけられるという回数も増えたし、友だちと話したり するのが多くなって学校も楽しくなったので◎これからも続け ていきたいです。
○なりたい自分に近づくために2週間意識してやってきたけど、 ほぼ毎日何にでもたくさん発表しようという気持ちになれたの で良かったです。少し目標が簡単すぎたので、高い目標を持って いこうと思いました。◎この取組が終わったからではなく、終わ ってから自分で意識していこうと思いました。もっと積極的に がんばりたいです。
○困っている人以外でも、人の役に立つということが結構難しい とわかりました。◎クラスの中でも、こういうプランを考えない でも自分から積極的に人の役に立っている人がいるので、とても すごいなと思います。自分も◎プランが終わってしまっても意識 して行動していきたいです。
○この取組をして「手伝いやらなくてもいいや」という気持ちが ◎「できるだけ積極的にがんばろう」という気持ちになれたのが 良かったところだと思います。ただやろうと思うだけではなく実 行しないといけないにもかかわらず、できていないことが多かつ たので実行することをがんばっていききたいです。
○このプランを通して、◎プランをする前より授業がわかるよう になったり、ドリルでの間違いが減って「毎日ちょっとずつ勉強 するだけでこんなに変わるんだ。」と思いました。△の日もあつ たけど、ほとんど◎なので良かったです。◎このプランが終わっ ても「学力向上」に向けてがんばっていききたいです。
○はじめの1週間は5回以上発表することが難しく、少し苦戦 していた部分もあったけど、積極的に手を挙げれば、先生があて てくれて、5回以上発表することは別に苦ではなく、2週目は◎ が多かったかなと思います。◎これからは、自分の意見や考え をたくさん発表したいと思います。正解が確実なものより私はこ う思うなどの自分の考えが人前で堂々と発表できるようになり たいです。
◎自分から進んでお手伝いをやるといろんな人から「ありが とう」といわれたので、自分もうれしい気持ちになった。この2週 間で△がなかったのが良かったです。でも◎が8個だったのでま だ意識が足りなかったのかなと思いました。◎これから自主的に やっていきたいと思いました。

きなかったことを次の課題設定へとつなげることで課題対応能力への働きかけができると考える。

4 総合考察

2018年4月より新学習指導要領の移行期間となり、特別活動は完全実施となる。学校現場では新学習指導要領に基づいた授業へとシフトしていかなければならない。本研究では学級活動(3)の授業モデルを4段階の思考過程を位置づけた学習過程と2段階の振り返り活動によって示した。青木(2002)は、学級活動(2)の指導時間において、限られた時間であるため、指導に当たる教師は事前に「ねらい」を明確に把握し、必要な資料を準備し、効果的な指導の手順、つまり学習過程を十分に考

慮しておくことが重要だと述べている。より効果的な成果を上げるために学習過程の工夫が必要だということは、限られた時間の中で行う学級活動(3)の指導にも当てはまると考える。また、和栗(2011)は「ふりかえり」についての理論を概観する中で、Moonによる振り返りの理論に触れ「ふりかえりは質の高い学習プロセスの一端を担うと同時に、学習行動自体にも影響を及ぼす」としている。学級活動(3)においても振り返り活動は、体験を通して学んだことを自己の変容につなげるための大切な活動であると考え。生徒が何をどのように振り返ることで特別活動のめざす資質・能力の育成につながるのか、今後の課題と言える。

さらに、学級活動を中核としたキャリア教育を推進し効果を高めるには、カリキュラム・マネジメントの実施が必要不可欠である。今後は、特別活動の全体計画、学級活動の年間指導計画、キャリア教育全体計画を見直し、特別活動を要とした自校のカリキュラム・マネジメントを確立したい。

学級活動(3)の授業題材においても、主体的な学習態度の育成や自己理解、自己の課題に気づき解決する方法の選定など学級活動(3)の内容ア、イ、ウに沿ったものを提案してきた。また、授業とキャリア・パスポートを関連させた活用にすることでキャリア・パスポートの記入が目的とならず、将来になりたい自分を思い描きながら取り組ませることができた。第1学年から第3学年までの学級活動(3)の授業題材とキャリア・パスポートの内容を完成させ、活用につなげたい。

主な引用・参考文献

- 青木孝頼 2002 特別活動指導の基本構想 文溪堂
 藤田晃之 2014 キャリア教育基礎論-正しい理解と実践のために- 実業之日本社
 文部科学省 2017 中学校学習指導要領解説特別活動編
 坂柳恒夫 2016 小・中学生の生き抜く力に関する研究-キャリアレジリエンス態度・能力尺度(CRACS)の信頼性と妥当性の検討-愛知教育大学研究報告 教育科学編, 65, 85-97
 和栗百恵 2010 「ふりかえり」と学習-大学教育におけるふりかえり支援のために-国立教育政策研究所紀要, 139, 85-100
 八並光俊, 後藤秀太郎 1996 職業観形成における学級活動の影響分析 進路指導研究, 17, 30-37

謝辞

本研究に際し、機会を提供していただきました福岡県教育委員会、糸島市教育委員会に心より感謝申し上げます。また、在籍校の校長先生をはじめ、関係の先生方に多大なるご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。